

## 第21回 歴史リレー講座「大和の文化と世界の繋がり」東大寺総合文化センター総長 筒井 寛昭氏 (H28.6.19)

奈良の人は控えめなのか、声高に自県の良さを主張されることが少ないようです。しかし、現代に続く日本文化の基礎が築かれたのは、飛鳥時代と奈良時代の約200年間です。特に若い人たちには、このことを理解してもっと外に向かって奈良をアピールしてほしいのです。

そもそも、われわれが「文化」と呼んでいるものは何でしょうか？それは歴史に限らず、その時代の人々の生きざまや考え方、目指す国造りを繋いでいったものです。建築・彫刻・絵画・文学など、文化遺産の制作原動力は人間の心の問題です。その心に思いを馳せずに単なる歴史の話に終わってしまっては意味がありません。日本人としての心を消化したうえで文化を学ぶことが重要です。例えば、東大寺への観光客はいつたい参拝者でしょうか、それとも見学者でしょうか？

その東大寺を訪れる修学旅行生に家族構成を尋ねてみると、3世代同居の若者は1割ほどです。彼らのほとんどは祖父母から日本の文化を教わる機会がないから、千年前と現代社会が連綿と繋がっていることを実感できていません。その結果、海外留学した学生は必ずといっていいほど苦労します。日本という国を紹介してくれと頼まれても、まともに説明することができないからです。

ひとつの信仰しか持たないアメリカ人が理解に苦しむ日本文化の一つに神仏習合があります。神は自然と人間との共存を願って崇められる絶対的な存在。仏は人間の心や行為に対する教えや戒めを下さる存在。まったく異なる両者だが車の両輪のように動かせば、より役に立つ宗教になるはずだ。こう考えた日本人は仏教を自國流に解釈して取り入れ、神道とうまく融合させたのです。

この神仏習合が広まったのが奈良時代。疫病、飢饉、内乱が続く中、人々が困難を乗り越えるための精神的な支えになりました。仏教の基本は人と人の繋がりです。日本は諸外国に比べて社会福祉活動が後れていると思われるがちですが、その歴史は意外に古く縄文時代まで遡ります。当時の障害者たちは周囲から援助を受けていますし、飛鳥時代の貴族は親を失った子供の福祉施設を作るなどして慈善活動に励みました。江戸時代の東大寺大仏殿には迷子を預かる小屋や、今で言う医務室まで備えられていました。

ところで、東大寺の大仏を建立したのは聖武天皇ですが、建立は目的ではありません。天然痘や飢饉などで苦しむ地方の庶民を救うため、天皇はまず、全国に国分寺を作り僧を派遣しました。彼らは医僧あるいは国造り僧と呼ばれ、医学、文化、建築などの豊富な知識で人々の生活を向上させました。そこで医僧は庶民に語りかけます。自分たちの暮らしが良くなつたのだから、次は日本という国をひとつにまとめようじゃないか。そのため一致協力して奈良に大仏を造ろう。こうして天皇は人々の絆を深めるための手段として大仏建立を計画したのです。

古来、都は近畿を中心に置かれました。中でも奈良では幾度となく遷都が繰り返され、飛鳥、平城京では四神（青龍、朱雀、白虎、玄武）を中心とした国造りが進みました。奈良はシルクロードを経て来た文化を知ることができる世界的にも稀有な場所です。法隆寺のエンタシス（柱の様式）も、薬師寺の台座に見られる葡萄唐草紋もギリシャから海を渡って来たもの。ただし、新しい文化に飛びつくのではなく、日本にとっての有益性を考慮したうえで導入し、在来文化と巧みに融合させています。その一方で、奴婢制度や道教は不要と判断しました。国としての方向性がすでに確立されていたのでしょうか。

しかも、平安京への遷都の際、社寺などの建築物などはほとんど奈良に残されました。平安京は応仁の乱で焼き尽くされたため、残っていません。奈良時代は75年と短命でしたが、その存在意義は非常に大きいといえます。幸いにも焼失を免れた奈良の文化を私たちは次世代に繋いでいかねばなりません。学校の授業では歴史（日本史）の時間が少ないため、子供が『古事記』を漫画で読む時代です。1300年続く文化をまず家族が子供に伝え、日本人としての心と主体性が確立された若者を育てる努力が必要です。

## 大和の文化と世界の繋がり

東大寺総合文化センター 総長 筒井寛昭

### はじめに

文化 ⇒ 時代の生き様 (その時代の人々の生きた姿) ⇒ その時代の人々の思いが反映したもの  
建築・彫刻・絵画・庭園・文学・遺跡など

↓

文化財・文化遺産と呼ぶ 【現在の寺社訪問者は、観光客(?) or 参拝者(?)】

現代は? ・ 祖父・祖母の同居 ・ 生まれた国への関心 ⇒ 減少

日本人の精神性は、奈良時代に「神仏習合が行われる」

神：自然との共存によって災害から守る (人間の力ではどうしようもない力と共存する)

仏：人々の心の持ち方で幸せな生活を送る (人の考えによって不幸にも幸せにもなる)

奈良時代の混乱した社会で、人々の幸せを願う心が、日本の文化を育て、人々が協力する「心のつながり」こそ、多くの困難を乗り越える力になることを体得し、1000年以上そうした文化を伝えてきた。

### 例：I、日本における社会活動の文化 <人々の協力する心を引き出す>

縄文時代 : 障害を持つ者が周囲の補助を受けながら生活

仏教の伝来の後 : 飛鳥時代に王族を中心に慈善的な活動が行われた

飛鳥時代 : 僧の道昭と道登 ⇒ 宇治橋の造営

本格的な活動は奈良時代の行基から

地域の人々と協同の活動 (貧民救済・治水・架橋) 【数千人の民衆が従う】

- ・ 池の造成と改修
- ・ 橋を架ける
- ・ 川の改修、護岸工事
- ・ 道を作る ⇒ 行基道
- ・ 布施屋 ⇒ 宿泊施設・食料の配給・けがや病気の手当て

活発な社会活動 (慈善活動)

<日本では、飛鳥時代以前より行われていたが、諸外国より遅れていると思っているものが多い。>

- ・ 当初は、国の機関などが中心の活動
- ・ 仏教における慈悲行(菩薩になる為の修行)としての活動
- ・ 純然たる個人の活動

日本の1つの文化として、継続してきた。

### 例：II、シルクロードとの繋がりによる海外文化の導入

<海外文化の導入の時代>

高句麗古墳 ⇒ キトラ古墳

### 文化の現在までつながっている例 : 【四神と相撲】

古代中国での自然哲学の思想 = 道教の世界観

仏教に取り込まれる：万物は木・火・土・金・水の5種類の元素からなるという説。

(四神) (四天王)

青<東>：青龍 (春) 持国天

赤<南>：朱雀 (夏) 増長天

黄<中央>

白：<西>白虎 (秋) 広目天

黒：<北>玄武 (冬) 多聞天(毘沙門天)

日本の都 : 飛鳥時代 (592~710) : 奈良時代(710~784:74年間)<平城京：69年間>

### 奈良時代における海外文化導入時の判断 <律令国家形成期>

- ・遣隋使・遣唐使・遣新羅使により、文化の積極的な受容があった。
- ・日本古来の文化を残しつつ海外の文化を取り入れた。  
(日本人にとって有益なものを選択する)
- ・科挙制度・宦官などは導入されなかった。
- ・道教は、正式に導入されなかった。

### 奈良の文化存在の意義

日本文化の基礎を築いた重大な役割を果たした。

- ・飛鳥から平城京遷都 ⇒ 社寺を初め、殆ど全ての文化が新都に移される。
- ・平城京から平安京遷都 ⇒ 南都の社寺や文化が全く移されなかつた。

京都：応仁の乱など多くの戦乱によって町が焼き尽くされる事が多かつた。

奈良：一部で戦乱があったが、文化の全面焼失はなかつた。

奈良は、法隆寺を初め各時代の(建)物が地上に残っている世界的に貴重な町である。

### 平城京でシルクロードの繋がり

仏世界 : 西安(大雁塔) ⇒ 東大寺(大仏様の蓮弁線刻)

エンタシスの柱：ギリシャ(パルテノン) ⇒ 中国(雲崗石窟) ⇒ 法隆寺(回廊の柱)

葡萄唐草紋 : ギリシャ(パルミラ) ⇒ インド(宮殿) ⇒ 中国(隋の鏡) ⇒ 薬師寺(台座) ⇒ 東大寺(鎮檀具)

1300年以上続いた日本文化を、如何に次世代に伝え、日本人としてのアイデンティティを持った若者たちが育ってゆく努力が、これからのはじめである。